

2025年2月（修正）

2023年1月 初出

歴史から見たラテンアメリカのかたち：その1

—「新大陸」で2つの世界が出会って—

渡邊利夫 *

【要旨】

この稿は、『歴史から見たラテンアメリカのかたち』というシリーズものの第一稿である。このシリーズで筆者は、ラテンアメリカが500年余の歴史の中で、どのようななかたちになったかを域外(と言っても主にヨーロッパとアメリカ合衆国)の国際政治との脈絡も考慮して、俯瞰する形で、描写的というよりも歴史の筋を大切にして語ろうと思っている。書くに際しては現地に長く滞在したことのある外国人の目を大切にしたい。

その始まりであるこの稿では、「大航海時代」にポルトガルとスペインが海洋に乗り出す様を説明し、コロンブスが1492年に「新大陸」に到達したことの意味を考える。その後に先住民とその文化のことを書き、この大陸が世界にもたらした贈り物へと続く。そしてこの広大な大陸が人種的、文化的にみて4つの地域で構成されていることを説明する。それぞれの地域の特色はあっても、ラテンアメリカは共通の文化的アイデンティティを持った一つの世界であることを述べて締めくくりとする。

キーワード：「大航海時代」、コロンブスの「新大陸」との出会い、先住民文化、アメリカ大陸からの贈り物、4つの地域。

* ラテンアメリカ・カリブ研究所上級研究員。1970年外務省入省、スペインを皮切りに米国、ブラジルなどのラテンアメリカ各国で勤務後、2010年から12年まで在ボリビア日本国大使。1986年ジョンズ・ホプキンス高等国際問題大学院(SAIS)留学。退官後南山大学などで非常勤講師。現在は先行研究に照らして現地で見聞した知識を整理する仕事をしている。本稿で示された見解は著者個人のものであり、ラテンアメリカ協会の見解を反映するものではない。正確を期したが、誤りがあれば筆者の責に帰す。

はじめに

クリストバル・コロン(英語名コロンブス)は西回りでインディアスと呼ばれていた東アジアに向けて船出し、1492年に「新大陸」に到達した。それから今日までに500年余の歳月が過ぎた。その間にラテンアメリカのかたちがどのように形作られたかについて、筆者は地域外の政治との脈絡も考えつつ、俯瞰する立場で、描写的というより歴史の筋を大切にして語ろうとしている。歴史というは、時の経過とともにその時々で様々な顔を見せるが、そこには一つの太い基層低音がある。それを語ることが歴史学の課題であり、歴史を学ぶ者のだいご味である。今日のラテンアメリカも歴史の歩みの中で作られたものであり、この地域のことを知るために歴史からの視点が欠かせない。この論稿はブラジル、カリブ海を含むラテンアメリカを舞台にしている。筆者は長い間仕事柄イスパノアメリカ世界と関わりを持ってきた。そこで自ずとラテンアメリカ・カリブ海地域でも主にイスパノアメリカ世界¹を念頭においてしまう。

ラテンアメリカ人でない者がなぜ歴史から見たラテンアメリカのかたちを語るかといえば、域外人の方がその国・地域の歴史を客観的に見ることができるし、いいところも、その国人々が触れられたくないようなことも遠慮なく言えるからである。日本語に井の中の蛙という言葉がある。普通この言葉は、井の中のことしか知らず、外の世界を知らないことを意味する。よって一度広い世界に出て外から井の中を見てみると

とが大切であるということになる。外の世界の者がラテンアメリカの歴史を語れば、井の中の人にとっても新しい発見があろう。

1. 「大航海時代」の始まり

近世に入って「大航海時代」が始まった。15世紀から海外に乗り出し、東アジアとの貿易で経済大国になったのはまずポルトガルであった。「航海王子」という呼ばれたエンリケ(1394-1460)が欧州最西南端のサグレスに航海学校を創って大洋に乗り出す準備を整え、金と奴隸を求めて西アフリカ沿岸を南下して1434年にボハドル岬を回航した。1488年にはバルトロメ・ディアスがアフリカ大陸の南端である喜望峰に到達し、ヴァスコ・ダ・ガマが1497-99年にインド西海岸のカリカットまで航海し「インディア航路」を開いた。インド、東アジアの各地に「商館」を置き、胡椒などの香料や絹布などを輸入し大きな利益をあげた。それは「点と線」の支配であった。「新大陸」との関係では、コロンブスの帰還後1494年にスペインと「トルデシリアス条約」を結び、1500年にブラジルを領有した。その後東北部でアフリカから連れてきた黒人奴隸を使って砂糖生産を興し、ポルトガルに繁栄をもたらした。

続いて海外に乗り出しヨーロッパの大國に躍り出たのは、1492年にイスラム勢力を追い出して「レコンキスタ(国土再征服運動)」を終え、スペイン統一の道筋をつけたカスティーリャのイサベル女王(治1474-1504)とアラゴンのフェルナンド王(治

¹ スペイン語圏アメリカのこと。

1479-1516)(通称「カトリック両王」)のスペインであった。同じ年に両王が送ったコロンブスが「新大陸」に到達すると、ブラジルを除くアメリカ大陸を植民地にした。先住民から財宝を略奪し、アンデス、メキシコで銀鉱山を開発した。カスティーリャは北部のビスケー湾の造船業、中部メセタの毛織物業を除けば工業や商業に無関心であったから、「新大陸」からの銀は貴重で、スペイン豊かにした。その銀は国外にも流出し、1580年頃から地金不足に陥っていたヨーロッパを潤し、東アジア、バルト海、レバントからの輸入の支払いに使われた。

2. 「大航海時代」の歴史的意味

世界史からみれば、イタリアで起ったルネサンス(1350年頃-)、地理上の「大発見」、宗教改革のあったこの時代は、ヨーロッパが中世を終わらせ近世に移行する時代である。13世紀末にマルコ・ポーロが『東方見聞録』を世に出すなどアジアとの交流が始まると、ヨーロッパ人の世界認識が変わり始め、自分達の住んでいるところ以外には怪奇異様な化け物が住んでいるという中世の考え方(増田 1971 pp.15-16)が変わり始めた。それでもまだ真と偽、新旧の知識が入り乱れていた。ところが「大航海時代」になってポルトガルやスペインが七つの海に乗り出し、アジアとの通商や「新大陸」の征服に乗り出す頃になると、開かれた世界像や新世界にも自分達と同じ人間で住んでいるとの認識を持つようになった。物流が始まり、大西洋を内海にしてヨーロッパ、アフリカ、アメリカの環大西洋で政治経済圏も生まれた。

1564年11月にミゲル・ロペス・デ・レガスピの率いる遠征隊がメキシコ太平洋岸のナビダ港を出て、約3ヶ月にわたる航海の末に、1565年2月にフィリピン群島に到着した。メキシコへの帰還ルートが開拓されると、以後およそ250年間にわたってアジアと「新大陸」の間でガレオン船による人と物の往来が始まった。こうして地球規模での交流が現実のものとなった。第一次グローバリゼーションである。ちなみにアジアとメキシコ間の太平洋ルートを使っては、メキシコから銀や染料のコチニール、カカオ、ワインが運ばれ、帰路の船ではアジアの絹織物、陶器、胡椒、シナモンなどが「新大陸」に運ばれた(清水 2015 pp.30-31)。

こうして世界史が始まった。それはヨーロッパが進んだ軍事力、技術、自然科学、文化によって優位な立場からの歴史であった。非西欧諸民族は、自国で民主革命、産業革命・近代化を成し遂げようと西洋の文明を学ぶ中で、それぞれ独自の歴史を発展させることになった。非西欧諸国にとっては固有の伝統文化を守り、ヨーロッパ文明とどう折り合いをつけるかが大きな課題になった。ヨーロッパからの挑戦に対して、アジアの古い伝統的な諸文明は鈍く反応するだけであった。他方でそれはヨーロッパの政治や国際関係が他の地域に大きな影響を与えた。我々が関心を持つアメリカ大陸の場合、植民地になることによって西洋文化圏に入った。ヨーロッパのインパクトは強力で、この「広大な地域において、ヨーロッパの」「伝道的精神や技術的優位に向かい合ったとき、固有の文化が衰退」した(マクニール 2008 p.38)。

3. コロンブスは文明のあった地に到達

これから筆者は、旧大陸の人間が初めてラテンアメリカの存在を知った時の話をしようと思う。その契機となったのは、言わざと知れたコロンブスの「新大陸」到達である。このジェノヴァ生まれの冒険心に富んだ商人は、スペインの「カトリック両王」の支援を得て、西回り航路でジパング島(日本)、カタイの大陸に行こうと、1492年8月にパロス港からスペイン国旗の王家の紋章の中に描かれているジブラルタル海峡(別名ヘラクルスの柱)を超えてプラス・ウルトラ Plus Ultra(ラテン語で「さらに彼方へ」)船出していった。そして図らずも10月12日に「新大陸」に到達した。それによってラテンアメリカのかたちの大枠、基本的方向性が決まることになった。

「発見」と「出会い」の論争

「新大陸」到達500周年の1992年前後に世界各地で様々な記念行事が行われた。その記念日を前にして、コロンブスが成し遂げたのはヨーロッパ人による「発見」という歴史的偉業だったのか、旧世界とプレコロンビアの時代から続く先住民の二つの世界・文明の「出会い」だったのか、という問題が盛んに議論された。特に先住民が多く住んでいた国で活発にあった。その議論の背後には、民族の発展にとって人種的、民族的差異などより、文明とか人的資源がはるかに重要であるとの考えがあった。

この論議のきっかけとなったのは、スペインが「発見500年」を控えた1981年に国

王を名誉総裁に「500周年祭記念委員会」を発足させ、「アメリカ発見500年記念」という標語を掲げて、コロンブスの偉業を称える祝賀行事の開催を呼びかけたことに因る。これに対しラテンアメリカの知識人達は自分たちの立場が軽視されているとして反発し、「発見・二つの世界の出会い500年」という標語を対案として出した(清水 1995 pp.175-176)。「新大陸」の「発見」という言い方は、スペインが自国の歴史的偉業、誇りとして長く使ってきた表現で、ヨーロッパ史観から出た言葉である。他方で「出会い」というは、ラテンアメリカ史観からの認識で、ラテンアメリカの知識人達はそのスペインの認識を嫌った。ラテンアメリカ側は、コロンブスがやってきた時には、既にアメリカ大陸にはヨーロッパ文明にも勝るとも劣らないすばらしい文明があったと主張した。「新旧二つの文明の『出会い』はその直後に先住民の征服という一時期の不幸があったにせよ、相互に文明の影響を及ぼし…文明や人種間の混合が進み、それを通じてイberoアメリカ²、もしくはラテンアメリカと呼ばれる新しい独自の文明圏が出現」する契機となったと考えた。他方スペインにより批判的な立場の人は、コロンブスの到達は、「ヨーロッパ人による先住民征服の始まりであり、激しい破壊や、略奪、搾取を伴った征服」は「これらの人々や多くの混血たちに悲惨さや不幸」をもたらし、「ラテンアメリカを今日の低開発状態や欧米先進国への従属化に置く」原因になったと思った(大井・加茂 1992 p.8)。

これは史実論争というより歴史認識の差

² スペイン・ポルトガル語圏のアメリカ。

からくる問題であろう。結局どちら側の認識が妥当かは、どの立場から歴史を語るかにより決まり、合意を得るのが難しいテーマである。それが 500 周年を契機に政治的論争にまで発展したのである。

アジア系先住民のアメリカ大陸への進出

「新大陸」にはコロンブスが到達するはるか以前の紀元前 1 万 3000 年前に北東アジアを起源とするモンゴロイド系の現世人類(ホモ・サピエンス・サピエンス)が、陸上の氷結で海平面が 100 メートルも低下したおかげであらわれたベーリング陸橋を渡り、その後氷期の温和な時期に無氷回廊を通って北アメリカ大陸へ進出した。そして紀元前 9000 年までに南アメリカ南端にまで到達したと考えられている(ブシュネル 1971 pp.13-20)。

ラテンアメリカ側は「新大陸」の祖先とはこの人々のことであり、もともとの住民であると考えた。彼らがメソアメリカ³でオルメカ文明(紀元前 1400-400)に始まってマヤ文明(紀元前後-900)、メキシコ中央高原に巨大ピラミッドや神殿で有名な古代国家テオティワカン(前 300-後 550/600)、テノチティトラン(現在のメキシコ市)でアステカ王国(14 世紀-1521)、南米の中央アンデス地帯で紀元前 2000 年頃に神殿が作られ始め、チャビン文化に始まってモチエ、ナスカ、ティワナコの文化、インカ帝国(15 世紀-1533)が生まれた。従って「新大陸」の「発見者」というのはコロンブスではなく彼らであり、

既に文明の名に値する文明を築いていたにもかかわらず、「大航海時代」にスペイン人がそれを力づくにより征服したと考えた。

筆者としては、ヨーロッパの「発見」か、二つの文明の「出会い」かの論争を考える際、「出会い」というからには、「新大陸」で先住民が築いた文明がどのレベルにあって、二つの文明の対等な「出会い」であったかどうかを見たい。コロンブスの到達前に、既に人が「新大陸」にいたという事実はそれほど重要でない。たとえ支配を受けたとしても、それは負の歴史の始まりではなく、高度な文明を学ぶことによって国が発展したと思えるからである。

先住民の文明

文明の発展度を知るためにには、最初に文明の定義をする必要がある。イギリスの考古学者のゴードン・チャイルドは、効果的な食料生産、大きな人口、職業と階級の分化、都市、冶金術、文字、記念碑的な公共建築物、合理科学の発達、支配的な芸術様式という 9 つの指標が文明か否かのメルクマールになるという(山本 2021 p.14-15)。

「新大陸」では、15 世紀後期に始まるインカ帝国(コロンビア南部のアンガスマヨ川からチリのマイポ川までの南北 4000 キロ、面積 98 万平方キロ)で、装飾用に金・銀・銅・プラチナ・錫を加工する彫金や青銅の合金術、かみそりの歯一枚も入らないと言われる精巧な石組みで神殿や城砦を建築する技術、クスコから帝国内に張り巡らさ

³ メソアメリカとは、メキシコ中部・南部、ユカタン半島、グアテマラ、ベリーズ、エルサルバドル、ホンダヌラスの一部などを指して考古学者が使う用語で、この地域は非常に地理、気候的多様性に富んでおり、早くから文明が栄えた。

れた「インカ道」、そこに一定の距離毎に置かれたタンボと呼ばれる宿駅と食料の備蓄倉庫、チャスキと呼ばれる引飛脚制度、大規模に開拓された農業用の段々畑と運河・灌漑、繊細で華麗な毛と木綿の織物などの文化を咲かせた。

メソアメリカのマヤ文化圏では、まずオルメカ文化が花を咲かせ、前800年頃からピラミッド型の構造物が作られた。その後各地に都市、巨大ピラミッド、王の墓を兼ねた神殿、宮殿、広場、球技場などが建設された。築城の形跡は見られない。故事来歴を記した石碑、発達した文字やゼロの概念を含む二〇進法の数字が刻まれ、天文学の知識と260日暦と365日暦を併用する暦を組み合わせた暦法、石彫が刻まれた巨大な公共祭祀建築である神殿、高度な土器・黒曜石の石器を製作する智慧を持っていた。

メキシコ中央高原ではテオティワカンで「太陽のピラミッド」、「月のピラミッド」、「羽毛の蛇神殿」、大都市ができ、交易システムを確立した。都市国家連合であったアステカ王国では、テスココ湖上の都市であるテノティトランに大ピラミッドと神殿、彫刻や彫像、公共広場、巨大都市が造られ、マヤ文化ほど複雑な文字体系はなかったものの、歴史、天文から租税を記録したエリート層を読み手とする「絵文書」、260日暦と365日暦を併用する暦システムがあった(関2022 pp.105-137)。

しかし旧大陸で広く普及していた火器、鋼鉄製の甲冑や農具にも利用でき文明を一步前に進める製鉄の技術、様々な用途で利用できる車輪・車の活用、大洋を航海する帆船は知っていなかった。リヤマやアルパカを除き、重荷を牽引し食用や戦闘に使える

馬・牛・豚などの四つ足の大型獣はいなかつた。大型獣がおらず、車輪を知らなかつたということは、輸送の制限を受けるばかりでなく、アメリカ大陸内で他の地域・文明圏との交流で制約を受けたことを意味する。というのも、文明の進歩には地域間の交流が非常に重要だからである。例えば旧大陸では文明間の交流が早くから盛んに行われ、「馬やらくだによって絹の道は、ユーラシア大陸を数千マイルも横断して中国とヨーロッパを結ぶハイウェイとなった」(ソーウエル 2004 p.367)。

何よりも残念なのは、知識・経験を表現し、書き残すことによって時空を超えて伝えるレベルの文字を知らなかつたことである。現代になっても先住民時代のことがよくわからない原因はそこにある。マヤ文明には、碑文などに書かれた王族や貴族の王朝史、暦・天文学を記す宫廷言語である象形文字(青山 2023 pp.34-36)と数字、アステカ文明には絵文書、インカ帝国には数字を記録するのに使うキープがあつたが、それでは旧大陸で発展したように知識を表現できなかつた。また文明を伝承する文字や紙・印刷技術を持たなかつた。そこで口承に頼ったり、紙の代わりに樹皮布に記録したりしていた(青山 2015 p.78)。紀元前4世紀にマケドニアのアレキサンダー大王はインドに遠征し、彼の死後各地にギリシャ人が残つたが、その一人で西北インドを支配していたミリンダ王が紀元前2世紀後半に仏僧と対談する『ミリンダ王の問い合わせ』という仏教書を残している。文字で書かれていたからこそ今日でも我々はそれを読むことができる。

先住民の宗教観

「新大陸」の文明がどの程度であったかを知るための指標として宗教について考えてみたい。宗教は人類のあるところに必ず生まれ、その文明の発展を知るためにものさしになる。もちろん「新大陸」の住民も神聖性を敬う宗教活動を行っていた。宗教は政治と社会統合を助ける。インカ帝国ではピラコチャが創造神で、雷、月、山の頂、湖、泉、露出した岩には生命が宿っているとして神聖視し、ワカと呼んだ。宇宙の支配者である山の神々は「カマック」というエネルギーを持っていることから特に重要で、供物を与えて神々である「ワカ」・「ビルカ」と互酬関係を結ぼうとした(大平 2023 pp.226-230)。「太陽の御子」と呼ばれたインカ王は太陽に若者を供物として捧げるなど祭祀・儀礼を行った。メソアメリカでは、世界は魂に満ちあふれており、自然のあらゆるものに神々が宿ると考えて天体、山、水源、洞窟、自然現象など敬った。王は超自然の力を持ち、神々と人間との重要な仲介者であることから祭祀を司った。マヤ地方で自然の山を崇拝し、「神聖な山」の象徴するものとして先祖の神々が宿る神殿ピラミッドをあちこちに作った(青山 2012 pp.29-30)。メキシコ中央高原でも山や火山が重要で、これらの「聖なる山」は地上界とは別の守護神の国(天上界)、死者の国である(地下界)へと通じる扉であると考えて、そのレプリカである大きなピラミッドをテオティワカンに建設した(嘉幡 2019 pp.18-20)。

いずれも或る民族を中心に展開する宗教で、太陽などの超自然的な力をたのみ、奇跡をねがい、すくいを求めた。宗教儀式を司る神官などがいて、国家行事として祭祀を行ない、建築・祭壇や宗教儀礼・祭、創造神話を持っていた。死ねば別の世界に行くと信じていたことから超人間的な靈魂観を持っていたが、布教に必要な文字化された聖典はなかったようである。現代の我々が考えるよう信仰が人の心を救う杖の役割を果たしていたかどうかはわからない。いずれも失われた古代宗教に位置づけられている。スペインの植民地になると先住民はカトリック教の信者になった⁴。

科学・技術で優ったヨーロッパ文明

筆者には、15世紀にヨーロッパが世界に乗り出し始めた「大航海時代」に、先住民の文明は旧世界との比較でいくつかの点で遅れていたように思う。特に科学の発達と技術の開発・進歩という点で彼我の文明の優劣ははっきりしていた。そこでアステカ王国やインカ帝国は、人の数で勝っていたにものの、火薬、甲冑、馬などの知識を持った知略に優れたスペインのコンキスタドーレス(征服者達)によって軍事的に征服された。一旦征服されると、力が一挙に先住民側からスペイン側に移り、支配と従属の関係ができる。そして先住民はヨーロッパの文化とスペインの植民地体制の中に組み込まれ、辺境の限られた生存空間に閉じ込められた。

なお、スペインに対する土着の文明の影

⁴ ボリビアに駐在していた時、先住民文化を売りにしている与党 MAS(社会主義運動)の民族衣装を着た女性国会議員が訪ねてきたので、あなたの信仰はキリスト教か、それとも別の宗教ですかと聞いたことがある。彼女はキリスト教徒ですとためらうことなく答えた。

響について言えば、「レコンキスタ」後の宗教心が高揚していた時代で、布教(しばしば「精神的征服」と呼ばれるもの=「文明化」)によって、「人間」である土着民をキリスト教徒化するのが神から与えられた責務であるというのがスペインの基本的認識であったことから、先住民に対する戦争が不正義にして不公正であるとバルトロメ・デ・ラス・カサス⁵らからの告発はあったものの、“インディオ”から学ぶことはないと考えていた。というのも未信徒の“インディオ”は「無辜の民」ではあるが、精神的無能力者であり、「役立たずで野蛮」で、それは自分達とは全く異質の世界の人間であるとして蔑んでいたからである。こうした認識から先住民の文化を評価せず、またその思考を引きずっとからこそ、スペインでは「新大陸」の「発見」という表現を抵抗感なく受け入れた。

ちなみに、8世紀にイベリア半島でムスリム⁶の支配に対する「レコンキスタ」運動が始まても、キリスト教の世界とイスラム教の世界との文化の共生が進み、スペイン人はアラビアとイスラムの先進的な文明⁷を学んだ。1085年に西ゴート王国の首都

であったトレドがキリスト教徒の手に落ちると、ここにアラビア語の書籍があったことからピレネー山脈を越えて優れた研究者がやって来た。そしてモサラベ(アラブ化したキリスト教徒)、ユダヤ人、キリスト教徒の協力の下に、アラビア語で書かれたギリシャ、ビザンティン、イスラム世界の進んだ学術・文化の文献が盛んにラテン語に翻訳され、西欧キリスト教圏に多大な影響を与えることになる。これが「一二世紀ルネサンス」である。

ところがスペイン人たちは、700年以上の間支配を受けた後にムスリムの勢力を追い出して、宿願の「レコンキスタ」を成し遂げると、自尊の念や他民族であるアラブの優位性を認めたくないという気持ちから、イスラム文明から様々なことを学んだことや「一二世紀ルネサンス」の意義について、すなおに口にしなくなった。もっともこれは何もスペインに限ったことではないようで、伊東俊太郎によれば、イスラム世界に対する屈折した感情がヨーロッパの研究者の間にあり、西欧が「一二世紀ルネサンス」でイスラム文明の影響を受けたことを余り認めないとのことである(伊東 1993 p.26)。

⁵ 1511年にドミニコ会のアントニオ・デ・モンテシーノスは説教でスペイン人の農園主(エンコメンドロ)が先住民を酷使していると非難し、これをきっかけに先住民が「理性を持った」人間であるかどうかの「インディアス論争」が起った。その急先鋒になったのがバルトロメ・デ・ラス・カサス(1474-1566)であった。彼の陳情を受けてフェルナンド王は1512年に「ブルゴス法」を制定し、先住民を人間であると認定し、自由と保護を与えながらキリスト教徒に改宗するように命じたが、必ずしも実行されなかつた。

⁶ アラビア語でイスラム教徒のこと

⁷ アラビア文明とイスラム文明の違いは、前者がアラブ人固有のアラブ人による文明、すなわち初期のウマイヤ朝(661-750)までの文明を指すのに対し(スペインを統治したのはその末裔の後ウマイヤ朝[756-1031])、後者はアッバース朝(750-1258)のイスラム支配下のバグダッドで、イスラムに改宗したキリスト教徒、ペルシャ人等がアラビア語に翻訳したギリシャ文明を咀嚼して更に発展させた文明である。広くイスラム世界に広がった。

最後に—今日では「出会い」論が有力

1492年にコロンブスが「新大陸」に到達した後の西半球の歴史は先住民がヨーロッパ文明化する歴史であった。そのおかげで遅れをとっていた先住民は文明化した。でも、最近ではヨーロッパが「新大陸」を「発見」したという言い方よりも、旧大陸との「出会い」論の方が有力である⁸。誰しも遅れていたという理由で、自らの存在とルーツをないがしろにされるのは耐え難いことである。もし日本が戦国時代にヨーロッパ人によって“発見”されたと言われば、随分腹のたつことであろう。

なお「出会い」論について付言すれば、先住民の血が濃い国、例えばインカ帝国のあったペルーで、政策的に国家の創世神話として先住民とその文化をプレイアップし、プライドとナショナリズム、自国民のアイデンティティを高めるために利用されたことがある(細谷 1997 pp.219-224 & 229-230)。また嘉幡茂は、メキシコにおいて先スペイン期と植民地時代とは異なった時系列にあり、この国の歴史は植民地時代から始まると考えていながら、外国人に対しては国内の先住民の古代遺産を自慢していると書いている(嘉幡 2019 p.169)。かようにイスパノアメリカ人の先住民文化に対する評価は複雑である。

しかし少なくともこの「出会い」論が、ス

ペイン人に過去の植民地時代の歴史の負の側面に目を向けさせ、西洋中心主義の歴史記述に再考を求め、抵抗か同化か、拒絶か西欧化かといったような二項対立で単純化してしまうことなく、その「狭間」を丁寧に見ていく(井上 2016 p.221)ためのきっかけになつたのであれば、それなりの意味はあつた。筆者には、コロンブスが「新大陸」到達した後のラテンアメリカが、先住民の血の濃さで地域差があるものの、スペインと先住民文化のメスティソ(混血)化の中で進み、それが今日のイスパノアメリカ文化の基調になっていることを考えると、結局は二つの民族と世界・文明が「新大陸」で出会ったことにより、特有の文化ができたことの方が重要な気がする。ついでながらこの議論は、スペインとラテンアメリカとの関係から始まった話であり、先住民が少なく、植民地化後に奴隸として連れて来られたアフリカ系アメリカ人が多いブラジルは余り関心を示さなかつた⁹。

4. 外縁部に追いやられた先住民の受難

「新大陸」にコロンブスが到達する前、先住民は中米北部・ユカタン半島、メキシコ中央高原、そして南米のアンデス地帯に文明を築き、狩猟・採集生活を中心のブラジルを

⁸ 発見という言葉を使う研究者もいるが、その場合は「発見」としてカッコをつけている。なお日本も「出会い」を経験した。中国文明との「出会い」は、飛鳥から奈良・平安時代にかけてである。大陸から盛んに文化を取り入れ、その中から独自の日本文化を生み出した。なおヨーロッパとの初めての「出会い」は戦国時代で、本格的に進んだ科学機技術を取り入れるようになったのは明治維新からである。

⁹ ブラジルは小中学校の教科書でペドロ・アルバレス・カブラルがブラジルを“発見”したと教えている。それでも、初めて上陸したポルト・セグロで2000年4月に「発見500年祭」が行われた際、先住民の抗議デモが起こった(イシ 2012 pp.43-45)。

含め、南北アメリカ大陸の広大な地域に散在していた。その人口密度は地域によってばらつきがあったが、いずれにせよ「新大陸」は先住民が自由に住む世界であった。

「大航海時代」にスペインに先立って海外進出を始めたポルトガルは、まず胡椒、貴金属、綿・絹など珍しい物品を求めてアジアへ進出したが、アジアには土着の長い伝統と強力な国があつて軍事的征服は容易でなかった。そこで自ずとポルトガルの支配は貿易を目的とする点と線の支配になった。ところが「新大陸」では鉄砲・甲冑、短剣など鋼鉄製の武器で武装し、馬などの大型獣を使いこなし、キリスト教の布教という宗教的信念に燃えていたスペイン人は、驚くほど限られた人数でメキシコや中米、中央アンデス地域にあつた王・帝国を征服し、面の支配を実現した。黄金に目のくらんだコンキスタドールと呼ばれる征服者の超人的な働きがあった。ポルトガルもアジアと違ってブラジルでは面の支配を行つた。そして半世紀という短期間に「新大陸」で植民地体制を確立した。

スペインが「新大陸」を征服した時、コンキスタドーレスは従わない先住民を情け容赦なく討伐し、戦争捕虜を奴隸にした。宣教師たちは聖俗両面でヨーロッパ文化を先住民社会にもちこみ、その一方で人種的な混血・同化も進んだ。支配者となったスペイン人は、大農園のエンコミエンダや銀鉱山で先住民を労働力としてこき使い、反抗する者には厳しくあつた。病気の抵抗力を持たなかつた多くの先住民が旧大陸から持ち込まれた天然痘、はしか、インフルエンザ、コレラなどによってバタバタと倒れた。彼らは常に従属的立場に置かれ、搾取の対象

となった。現代風に言えば尊厳が守られないどころか、一個の人間としても認められなかつた。その結果先住民の人口が著しく減少した。それは、昔のこととはいえ、ラス・カサスのいうスペインによる組織的な先住民・文化に対する虐待・殺戮、破壊であった。この先住民は人間か、という「インディアス論争」は、出版物を通じ 1570 年代からオランダやユグノー(フランスのカルヴァン派プロテスタン)など一般民衆の間に広まり(エリオット 1975 pp.152-153)、「黒い伝説」として批判のネタになつた。

先住民は、たとえ生き残つても隔絶された孤立地に追いやられた。他方でスペイン人は西ゴート王国(418-711)、ムスリム支配の時代(711-1492)以来の伝統で主に都市に居を構えた。こうして先住民の被支配者階級としての地位と生活は、封建的植民地体制のもとで固定化されていく。ブラジルでは、狩猟・採集生活段階にあつた“インジオ”は拘束されるのを嫌つて内奥地に逃亡したり、殺されたりした。そこでアフリカから多数の黒人奴隸が連れて来られ、北東部の砂糖農園などで酷使された。

こうして「新大陸」は西欧キリスト教文明圏の外縁部としての歴史が始まるが、それでも先住民の伝統的なものが全て消えたわけではなく、メソアメリカ、アンデスなどのように今でも先住民人口が多い地域で、長年にわたる試行錯誤や取捨選択の末に新たな文化的創造を積み重ね、今に残る宗教儀礼、村の儀式・行事、祭り、生活習慣、風俗、思考や行動の中で、彼らの生活と密接に結びついて生き残つてゐる。

5. 「新大陸」からの贈り物

「新大陸」が旧大陸の人々にもたらした貴重な贈り物のことも見過ごせない。ウィリアム・H・マクニールは、アメリカ大陸が旧世界に与えた影響について¹⁰、大量の金銀の流入がヨーロッパで起こした価格革命とともに、旧世界では知られていなかった栽培植物をあげている。これらのアメリカ産の植物は食糧の供給力を増大させ、人口を増加させた(マクニール 2008 pp.46-48)。

その贈り物を生み出したこの大陸の地理的特徴をまず説明しよう。南北に長く伸びる「新大陸」は、中米のほぼ全部と南米の三分の二が南北回帰線の中に入っている。平地では熱帯、亜熱帯性気候の土地が多い。この熱帯性気候と年平均気温が6度という南米最南端のフエゴ島まで緯度、そしてアンデス山脈では高度の差によって気候がバラエティーに富んだ土地柄である。その結果様々な作物を育んできた。

旧大陸の人達は、「新大陸」の先住民が長い年月をかけて品種改良、栽培したトウモロコシ、カボチャ、インゲンマメ、ラッカセイなどのマメ類、トウガラシ、ジャガイモ、サツマイモ、トマト、キャッサバ(イモの一種)、キヌア、ヒマワリ(北米原産)などの食用植物や、チョコレートの原料になるカカオ、チュインガムのもととなるチクル、タバコなどの嗜好品、ゴム、木綿用の繊維が長い良質の綿花、赤紫色の染料になるストウの木や洋紅のコチニール、龍舌蘭の繊維を使

って作るサイザル麻、アイスクリームに欠かせないバニラ、パパイヤやアボカド、マラリアの治療薬でトニックウォーターにもなるキニーネ、高山病や苦痛を和らげ麻醉剤にもなるコカなどを手に入れた。これらは全ての人類に対する「新大陸」からの貴重な贈り物である(大井・加茂 1992 pp.24-25)。

「新大陸」の各地で栽培されていたトウモロコシは南欧で急速に広まり、メキシコ原産のトマト、インゲンマメもヨーロッパの風土に馴化した。初め鑑賞用であったトマトは、今やイタリア料理に不可欠の食材であるし、アンデス高原地帯原産のジャガイモはヨーロッパでかなりゆっくりと普及し、18世紀後半になって北欧で定着し始め、今や主食の座を占め、人々を飢えから救った(ウェザーフォード 1996 pp.90-97)。これらの食物はヨーロッパを介してイスラム世界、メキシコ・フィリピンルート経由でアジアにも伝播した。とりわけ生産性の高いトウモロコシとジャガイモは重要であった。この作物に早くから注目していたアダム・スミス(1723-90)をして、「馬鈴薯やとうもろこし……この二つのものは、ヨーロッパの農業が、否おそらくはヨーロッパそのものが、その商業と航海業との偉大なる拡張のおかげで獲得したもっとも重要な改良である」と言わしめた(初瀬 2012 p.16)。

「新大陸」は一次產品の宝庫

「新大陸」との物流が始まると、ラテンアメリカは第一次產品を生産するところとし

¹⁰ なおマクニールは、「大航海時代」に人の交流が盛んになることによって、世界的レベルで病気の伝播という現象が起こったことも指摘している。旧大陸より「新大陸」に天然痘、はしか、チフス、黄熱病、マラリアなどが入り込み、先住民の人口減を招いた。

て重要な位置を占めようになった。最初はスペイン植民地から金、銀がヨーロッパへ流れ込んだ。金は16世紀初頭から一世紀半の間に18万5000キログラムがスペインに輸入され、ヨーロッパの金の総量はおよそ5分の1増大したという(ソーウェル 2004 p.379)。銀の場合、1550年代から金を上回る量がボリビアのポトシ銀山やメキシコの複数の銀山からスペインに送られ、フェリペ二世(治 1556-1598)末期には王室に対するアメリカ銀の年平均輸送額は200万ドゥカードを越え、王室収入の5分の1ないし4分の1にのぼった(エリオット 1975 p.140)。余り輸出するものがなかったヨーロッパはこの金、銀を東アジアとの交易の支払いにあてた。また銀の輸入が増大するにつれて、通貨を大量に鋳造できるようになり、ヨーロッパで物価騰貴がおこり、「価格革命」を引き起こした¹¹。富の基準が中世の土地から貴金属に移り、資本家階級が生まれ、「近世資本主義」の起点になった(近藤 2011 pp.74-83)。ちなみに現在でもラテンアメリカ産の銀は上位10カ国で50.3%のシェアを占めている(2021年)。ブラジルでは17世紀末にミナス・ジェライスで金鉱が見つかり、大量の金がポルトガル本国に輸出され、この国を“金ピカ”的時代にした。そしてこの金はイギリスとの貿易代金の決済に使われ、英国の産業革命を助けることになった。

またラテンアメリカは食料資源の宝庫であり、アジア原産でレバント(地中海東海

岸)経由で輸入されていた砂糖がブラジルやカリブ海の島々で生産されるようになると、ヨーロッパに大量に輸入され、高級品から大量消費品になった。19世紀になると南米西海岸で採取された肥料の鳥糞グアノ、硝石はヨーロッパ農業の生産性を高めた。19世紀後半に米国のユナイティッド・フルーツ社がカリブ海地域で生産するバナナは米国人家庭の食卓を豊かにした。欧米は北半球の温帯に位置しており生産できないコーヒー豆やチョコレートの材料になるカカオ豆などの熱帯産品を輸入し、生活に潤いを与えた。南米南部東海岸で生産される小麦は増大するヨーロッパ人の日々のパンとなり、トウモロコシ、牛肉が家庭の食卓に並んだ。羊毛も重要であった。

近年になっても広大な国土のお陰で第一次産品の生産は重要で、2022年のラテンアメリカの食料生産の割合は大豆53%、砂糖(エタノールを含む)33%、トウモロコシ18%、小麦4.2%、牛肉25%、鶏肉21%、豚肉7.9%である(OECD/FAO 2024年版)。また天然資源では、例えばベースメタルの大規模な鉱区があり、世界の埋蔵量のシェアは鉄鉱石19.3%、ボーキサイト40.3%、銅36.3%、錫22.1%、亜鉛21.5%(但し生産量)である(2023年)。レアメタルではニッケル、ニオブ、リチウム、ホウ素、モリブデン、セレン、レニウム、タンタルなどが重要である(U.S. Geological Survey 2024)。化石燃料では原油の可採埋蔵量が世界の18.7%で、天然ガスのそれは4.0%である(2019年)。

¹¹ エリオットは、アメリカ銀と価格革命との関係や賃金上昇と物価上昇の時差からくる利潤が資本主義の発達を促したというアール・J・ハミルトンの説には未だ色々と確認すべき問題があると指摘している(エリオット 1975 pp.107-109)

6. 多様なラテンアメリカは 4 つの世界

「新大陸」の地理的特徴はその広さと多様さである。総面積は 2044 万平方キロ(日本の 54 倍)で、地表の 15.3%を占めている。つまり「新大陸」との「出会い」によって世界はそれだけ面積を増やした。総人口は 6.44 億人(世界の 8.2%、2023 年)である。従って人口に比して面積が大きく、人的資源よりも自然資源が豊かである。

このような「新大陸」に 15 世紀末から旧大陸の征服者たちがやってきた。イベリア半島以外のヨーロッパの植民者も加わり、アフリカ奴隸を導入したことから、この地域はスペイン、ポルトガル文化が支配的ながらも、先住民文化、アフロ文化、ヨーロッパ文化という三つの文化が混在する世界となった。その後アジアからも移民が入った結果、ラテンアメリカは各大陸からの人種が合流し、人種のるつぼになった。今でも様々な言語と文化が共存している。

ウイリアム・ウッドラフは、「ほとんどの国がイベリア半島の文化を色濃くし、植民地であった歴史的背景、宗教、法制、知的および学問的伝統を共有しているにもかかわらず、現実に見られるのは、はかりしれない多様性、驚くほどの対照性」であると、その多様性・対照性を強調している(ウッドラフ 2003 p.261)。国の規模でも、南米大陸の半分近くを占めるブラジルという大国があるかと思えば、カリブ海地域で数万人規模のミニ国家があり、経済的に発展した中進国と経済発展のバスに乗り遅れた国があるなど、多様性・対照性が際立っている。

ラテンアメリカは、通常“場”と“主体”という二つの観点から、大きく 4 つのサブ地

域に分けられる。なおこの“場”的設定は、地理的というよりも概念的な場所を指し、一国の中でも地域によりそれぞれの“場”的特徴に強弱があったりして、混在している。

先住民が多かったメソアメリカ、アンデス地域

この“場”は、もともと多くの先住民が集中し、文明を築き、繁栄していたところである。プレコロンビア時代に古代文明が栄えていたことから今でも先住民系人口が多い。スペインは、この“場”で潤沢な先住民の労働力を使い、収奪的な経済社会を作った。植民者にとって先住民は大切な労働力であり、大農園や銀鉱山で働く、富を蓄積した。清水透は、このことから植民地社会は先住民社会に寄生している状態になり、“インディオ”はゴミのように扱われたと言う(清水 2015 pp.22-23)。そしてこの地域でスペイン人と先住民との間で大規模な人種の混交が進み、今日のメスティソ(混血)色の強い文化が誕生した。

ヨーロッパ系が支配的な南米南部地域

この“場”は、具体的にはアルゼンチン、ウルグアイ、チリなどである。ここでは、スペイン人が植民した当初金銀が見つからず、もともと住んでいた狩猟、遊牧を主な生業とする先住民は野蛮と見なされ駆逐された。先住民という労働力が調達できなかったことから、征服者やスペインにとって余り価値のない辺境の土地であった。ところが 18 世紀後半になると肥沃なパンパ平原を活用し、ヨーロッパ市場向けに牛肉・小麦などの食糧・皮革を輸出することで発展し始めた。独立後にイタリア、ドイツ、東欧、日本等か

らの移民が多数流入し、急速に発展した。そして今日ラテンアメリカの中でも西歐的かつ豊かな町ができて、最も経済の発展した地域になっている。

カリブ海地域

ここは、現在ドミニカ共和国とハイチのあるエスピニョーラ島やキューバ島、その他の小さな島々からなる地域で、「新大陸」の「発見」後最初にスペイン人が植民した地域である。苛酷な労働や持ち込まれた病原菌等によりタイノ、アラワク、カリブ族などの先住民が著しく減少し、貴金属が余り産出されず早々に開発から取り残された。その後この地域はスペイン植民地時代を通じて、本国へ銀などの富を送る中継基地としての役割を担った。ところがこの地域の気候が適していたのか、貴重品扱いされていた砂糖の生産が小さな島々で始まり、その後ハイチ、ジャマイカなどの大きな島にも広がると、欧米列強の入り乱れての侵略を受け、ヨーロッパ列強の植民地となった。

そして大量のアフリカ系奴隸が労働力として輸入され、砂糖・コーヒーなどのプランテーション型経済が発達した。その結果、アフリカから宗教や音楽がもたらされ、多様な文化が混交した。大陸のスペイン語圏との関係は薄かった。20世紀になってからはアメリカ合衆国の強い政治的影響下に置かれた。独立は、ハイチ、ドミニカ共和国が早かったが、キューバが独立するのは19世紀末、小アンティル諸島の国々が独立するのは20世紀後半になってからである。

ブラジル

ブラジルは、南アメリカ大陸の48パーセ

ントを占める広大な国である。トゥピ、ジエ、カリブ、アラワク系の先住民が住んでいた。ポルトガルの植民地であったこと、北東部で砂糖を生産するためにアフリカ系黒人奴隸の導入したこと、広大な領土という自然条件から、スペイン語圏とは異なる文化と気風を形成し、異なる発展プロセスを辿った。19世紀からは南部地域にイタリア人、スペイン人などの移民が入り、人種の混淆が進んだ。今日アマゾンという未開発地域と、上記の第二の“場”的特徴を持つ南部に加え、アフリカ系の人種が多いことで第三の“場”的特徴を持つ北東部を擁するなど非常に多様性に富んだ国である。植民地時代にポルトガルの支配するブラジルとスペイン語圏植民地とは余り交流がなかったことから、かなり違ったアイデンティティを持っている。

おわりに

これまで筆者はラテンアメリカの特徴を俯瞰して語ってきた。またこの広大な地域が一つのまとまった地域であるとの立場から述べてきた(但しカリブ海の小アンティル諸島は別の世界を作っており、この項では主に大陸部を念頭に書いている)。もちろんラテンアメリカ人という国籍はないが、この地域の人達は自らを“ラテンアメリカ人”であると思っている。人々は生存の場としての「新大陸」という地理的概念ということだけでなしに、ソフトの概念、すなわち同じラテン系の言語、思考様式や文化、キリスト教を共有している地域・世界で、そこに住むのが自分達であると認識している。M.ピコーン＝サラスも、ラテンアメリカ各国の

歴史はそれぞれ大きく異なるにも拘わらず、「現在の世界を地理的にみて、イスパノアメリカほど強い家族的親近性をもっている地域はほかにない」と述べている(ピコーン=サラス 1973 p.55)¹²。これはアジア、アフリカ、中東などとの大きな違いである。ラテンアメリカ人としての認識を共有する磁力は、人種的な違いや地域の事情の相違を超えて、歴史の様々な面で顔を出している。

そうなった理由としては、未だ世界史の舞台に登場せず、各地域で異なった文化の花を咲かせていた先住民時代のことはさておき、植民地時代も独立後も、①長い間この地域が大西洋と太平洋にはさまれた旧大陸とは異なる地理的に一つの大きな塊であったこと、②大航海時代にヨーロッパ文明のスペイン人とポルトガル人がやってきて、その外縁部として植民地時代を経験したこと、③イベロアメリカの文化、法、宗教、言語を受け入れ、非常に似通った価値基準を持ったことなどに因る。この共通の環境と文化的土壌があるからこそ、ラテンアメリカ地域の住民は強い「情緒的な親近性」を持ったのである(ピコーン=サラス 1973 pp.53-55)。ラテンアメリカには、“村”的秩序を乱すような突出した国力のある国もない。ちなみにアメリゴ・ヴェスپッチが新世界としての“アメリカ”と呼んだこの地域は、アメリカ合衆国が含まれる時も含まれない時もあるが、往々にしてアメリカ合衆国は別の文化圏の国であると認識されている。

日頃ラテンアメリカの人々が意識しているか否かにかかわらず、この地域で一つの

兄弟意識を見つけることは容易で、人々はこれまでラテンアメリカ人としての一体感、連帯感を醸成させてきた。国家間で資源や国境線の確定を原因とする戦争はあっても、宗教や民族対立によって戦争にまで発展したことはない。ブラジルとスペイン語圏の間でミクロのアイデンティティの違いはあっても、スペイン語圏内でそれぞれの国のアイデンティティは何かという問い合わせ聞いたことがない(但し多文化のブラジルにはそれがあった)。人々の連帯感は深層心理として空気のように存在している。ラテンアメリカ諸国が米国、域外国との関係で、江戸時代の「長屋の住民」よろしく、外の者に対し団結して事にあたろうとする連帯感を持っているのは、長年この地域に関わってきた者の強い印象である。この意識があるからこそラテンアメリカ各国の政治・経済、諸国間の関係のみならず、ラテンアメリカ地域を一つの個体として見る歴史があっても良い。それは筆者がラテンアメリカを一つの世界として、マクロ立場からラテンアメリカのかたちを語る所以でもある。

それでは、ラテンアメリカ人が本当にいるのかと問われれば、自分達をラテンアメリカ人と呼ぶ人はいない。むしろ十羽一からげにされることを嫌う。自分はメキシコ人、ペルー人、ブラジル人であると答える。独立して以来各国は異なる道を歩むようになったからである。ラテンアメリカ諸国の仲間内ではナショナリズムからライバル心も相当強く、そういう時は自分の国籍の顔がより強く出る。一つにまとまるのがなか

¹² 著者はブラジルのことを想定していないようであるが、ブラジルを含めてイベロアメリカと読み替えることも可能である。

なか難しい。ワールドカップのサッカーの試合を見るまでもなく、ライバル意識はつとに知られている。国境線を巡って歴史上

幾多の紛争が勃発し、今日まで当事国間に複雑な感情、時には怨恨を残していることも忘れてはならない。

参照文献

- 青山和夫(2012) 『マヤ文明—密林に栄えた石器文化』、岩波書店。
- 青山和夫(2015) 『マヤ文明を知る辞典』、東京堂出版。
- 青山和夫(2023) 「マヤ文明」 青山和夫編 『古代アメリカ文明』、講談社。
- イシ, アンジェロ(2012) 『ブラジルを知るための 56 章』、明石書店。
- 伊東俊太郎(1993) 『十二世紀ルネサンス 西欧世界へのアラビア文明の影響』、岩波書店。
- 井上幸孝(2016) 「メソアメリカの世界像」 秋田茂・永原陽子・羽田正・南塚信吾・三宅
明正・桃木至朗編著『「世界史」のなかの世界史』、ミネルヴァ書房。
- ウェザーフォード, ジャック・M(1996) 小池佑二訳 『アメリカ先住民の貢献』、パピル
ス。
- ウッドラフ, ウィリアム(2003) 原剛/菊池紘一/松本康生/南部宣行/篠永宣孝訳 『概説現
代世界の歴史』、ミネルヴァ書房。
- エリオット, ジョン・ハクスター(1975) 越智武臣・川北稔訳 『旧世界と新世界 1492-
1650』、岩波書店。
- 大井邦明・加茂雄三(1992) 『地域からの世界史第 16 卷 ラテンアメリカ』、朝日新聞社。
- 大平秀一(2023) 「インカと山の神々」 青山和夫編 『古代アメリカ文明』、講談社。
- 嘉幡茂(2019) 『テオティワカン「神々の都」の誕生と衰退』、雄山閣。
- 近藤仁之(2011) 『ラテンアメリカ銀と近世資本主義』、行路社。
- 清水透(1995) 「コロンブスと近代」 歴史学研究会編『講座世界史 1 世界史とは何か』、
東京大学出版会。
- 清水透(2015) 『ラテンアメリカ 歴史のトルソー』、立教大学ラテンアメリカ研究所。
- 閔雄二(2022) 「アンデスとメソアメリカにおける文明の興亡」 荒川正晴・大黒俊二・小
川幸司・木畑洋一・富谷至・中野聰・永原陽子・林佳世子・弘末雅士・安村直巳・吉澤
誠一郎編 『世界史 14 南北アメリカ大陸 ~ 一七世紀』、岩波書店。
- ソーウェル, トマス(2004) 内藤嘉昭訳 『征服と文化の世界史』、明石書店。
- 初瀬龍平編(2012) 『国際関係論入門』、法律文化社。
- ピコーン=サラス, マリアーノ(1973) グスタボ・アンドラーデ、杉江四郎訳 『イスパノ
アメリカ文化史』、河出書房新社。
- ブシュネル, ジェフリー・H・S(1971) 増田義郎訳 『最初のアメリカ人』、創元社。
- 細谷広美(1997) 『アンデスの宗教的世界』、明石書店。
- マクニール, ウィリアム・H(2008) 増田義郎・佐々木昭夫訳 『世界史(下)』、中央公論
新社。
- 増田義郎(1971) 『新世界のユートピア』、研究社。
- 山本紀夫(2021) 『高地文明 : 「もう一つの四大文明」の発見』、中央公論新社。